

呪いを解くには番になる
しかないと告げられて
退魔師の相棒に神社
の結界の中で一晩かけ
て祓われるカントボー
イ

「……っ、は……」

褥の上で、背中を反らす自分の姿がどれだけみっともないか。蓮司は分かっていた。

晃弥の掌が鎖骨の窪みをなぞる。たったそれだけで、呪いに冒された身体の神経が白く焼ける。退魔の経文を頭の中で唱えようとした。——臨、兵、闘。三文字目で言葉が霧散する。掌から伝わる熱が思考の回路をひとつずつ塞いでいく。指の腹が動くたびに皮膚の下で何かが疼いて、蓮司は畳に敷かれた褥を無意識に握りしめた。

「脈が速いな」

頭の上から晃弥の声が降ってくる。低い。抑制されている。任務中に状況報告をするときと同じトーン——のはずだった。けれど蓮司の耳は、その声の底に沈む微かな震えを容赦なく拾ってしまう。声帯が強張っている。喉の奥で感情を押し殺す音がする。

「……呪いの影響だ。気にするな」

嘘だ。自分の鼓動が速いのは呪いのせいではない。分かっている。嘘だと分かっている、晃弥も「ああ」とだけ返した。その一音にすら力みがある。蓮司の耳が勝手にそれを拾う。

蠟燭の灯りが畳に長い影を落としている。注連縄で区切られた結界の中は外界と完全に隔絶されていて、虫の声すら遠い。聞こえるのは蠟燭の芯が爆ぜる微かな音と、晃弥の呼吸

と、自分の心臓の音だけ。蠟の焦げる匂いが鼻腔に沁みる。本殿の古い木材と、晃弥の汗の匂いが混ざって、蓮司の意識を否応なく今この場に繋ぎ止めている。

——三十分前のことを思い出す。

鶴見が「番の契り」と告げたときの、晃弥の横顔。壁に押し当てた拳の関節が白くなっていたこと。指の骨が軋む音が、静まった廊下に小さく響いた。そして「俺がやる」と言った声。その声は硬く、乾いていて、内側から罅が入る直前の器のような音がした。

蓮司の耳は嘘を見抜く。退魔の現場で妖の位置を音で捉えてきた聴覚は、人間の感情の微細な揺れも容赦なく拾い上げる。

晃弥の声は冷静を装っていた。だがその奥で、何かが——軋んでいた。

「……蓮司」

名を呼ばれて意識が引き戻される。晃弥の掌が蓮司の腹部に達していた。帯を解いた装束の前がはだけて、蠟燭の炎が呪いに作り変えられた身体を橙色に染めている。

肩から胸まではいつもの自分だ。細い、傷だらけの、退魔師の身体。右の肋骨に一年前の任務で負った斬創の痕がある。左肩に呪術の焼痕。見慣れた自分の身体。だが腰から下——

骨盤の輪郭が変わっている。股の間にあるものが、蓮司が二十六年間知っていた自分のものではない。

（これは一時的な呪いの症状だ。任務中の負傷と同じだ。……同じ、はずだ）

理性がそう結論づける。だが晃弥の指先が臍の下に触れた瞬間、蓮司の腰が勝手に浮いた。

「——っ」

歯を食いしばる。奥歯が擦れる音が頭蓋の中に響く。声を出すな。感じるな。これは儀式だ。生命力を経絡に沿って注入し、呪いの核を焼き切る——ただの処置だ。

「力を抜け。……生命力が通りにくい」

「わかって……る」

分かっていない。身体が分かっていない。晃弥の指先から注がれる生命力が熱い波になって下腹を満たすたびに、変化した器官の奥がじんと疼く。知らない感覚だ。男の身体では経験しようのなかった、内側が蕩けるような感覚。意志とは無関係に、身体の深いところが晃弥の手を受け容れようとしている。それが蓮司にとって何よりも恐ろしかった。

蓮司は目を閉じて経文を再開した。臨、兵、闘、者、皆

晃弥の手が太腿の内側に触れた。

「——陣、列……っ」

経文が崩れる。脚が反射的に閉じようとして、晃弥の手に阻まれた。大きな手。霊刀を振るう手。指の腹に剣胼胝が張っている。その硬い手が蓮司の膝の内側を包み、じわりと力を込めて開かせようとしている。掌の熱が太腿の皮膚を通して筋肉の奥にまで沁みる。

「蓮司」

名前と呼ぶな。——その声と呼ぶな。

「……開け。手順通りにやる」

蓮司は膝を握りしめた。爪が自分の掌に食い込む。半月の痕が残るほどに。それでも脚を開いた。理性の砦を総動員して、晃弥の前に身体を晒す。

晃弥の呼吸が一瞬止まるのが聞こえた。

(——聞こえてしまった)

蓮司は自分の聴覚を恨んだ。晃弥が蓮司の変化した身体を目の前にして、息を呑んだ音。声帯が閉じて、空気の流れが止まって、再び動き始めるまでの零コンマ数秒。その一瞬の音の中に含まれていたもの——衝撃。動揺。そしてもうひとつ、名前をつけてはいけない何か。その何かの正体を蓮司の耳は正確に読み取ってしまっていたが、思考が認識を拒んだ。

晃弥の指が太腿の内側を滑り上がる。ゆっくりと。蓮司の皮膚が触れられた場所から順番に粟立っていく。呪いが感覚を鋭敏にしている——そう理屈をつけても追いつかない。普

段なら何でもない場所が、今は触れられるだけで神経の先端から腰の芯まで細い稲妻が走る。指の腹が肌の上を移動するたびに産毛が逆立ち、皮膚が晃弥の体温を記憶していく。

「……っ、ん」

声が漏れた。小さく、掠れた音。蓮司は自分の口を手のひらで押さえた。掌に当たる自分の吐息が熱くて、それすら新しい刺激になる。

「痛むか」

「痛くない」

即答した。痛くない。痛くないことが問題なのだ。痛みなら耐えられる。退魔師として幾度も修羅場を潜ってきた。骨を折られても意識を保った。だがこの——身体の内側から這い上がってくる甘い疼きには、耐え方が分からない。

晃弥の指先が蓮司の変化した部位に触れた。

「——あ」

声が出た。押さえた指の隙間から、聞いたことのない音が漏れた。高く、細く、掠れて——男の喉から出るはずのない音。自分の喉から立ち上った振動が掌を震わせて、その震えが唇に伝わって、蓮司は自分の身体が自分から離れていく感覚に眩暈がした。

(なんだ今の声は。俺の声じゃない。こんな……こんな音を俺の身体が出すのか)

蓮司の思考が固まる。自分の声に対する衝撃で一瞬意識が空白になる。だが身体は止まらない。晃弥の指先が生命力を注ぎ込みながら蓮司の変化した器官の輪郭を辿るたびに、皮膚の下で脈打つ何かが応答して、甘い波が腰から背骨を駆け上がる。指先が触れる場所ごとに快楽の地図が描かれていくようで、蓮司はその地図を理性で消そうとして、消すそばから新しい線が引かれていく。

「は……っ、あ……」

経文が頭から飛んだ。代わりに蓮司の耳が拾うのは自分の喘ぎだけだ。結界の内壁に反響して、増幅されて、逃げ場なく鼓膜に突き刺さる。聴覚が優位な蓮司にとって、自分の声は最も残酷な刺激だった。自分が快楽を感じている証拠を、自分の耳が逃さず拾い上げて、意識に叩きつけてくる。声を聞くたびに羞恥が脊髄を灼いて、羞恥が快楽と混ざり合って、さらに深い場所で疼く。

（呪いのせいだ。呪いが身体を変えた。呪いが感覚を歪めた。俺が感じているんじゃない。呪いが——）

晃弥の指が蓮司の内部に入った。

「——っ、あ……ッ」

背中が褥から浮いた。腹の底から突き上げるような快楽の波に、蓮司の視界が白く弾ける。呪いの核が下腹の奥にあるのは感覚で分かる。黒く冷たい塊が蓮司の身体の深部に根を

張っていて、そこに向かって晃弥の生命力が流れ込んでくるたびに、核が反応して熱を帯びる。連動して周囲の神経が甘く灼ける。核と快楽が連動している。呪いを解くために快楽を受け容れなければならないという構造の残酷さに、蓮司は歯の根が合わなくなった。

「……蓮司。力抜けて言ったろ」

「抜いてる……っ」

「嘘つけ。中、全部締まってる」

その言葉に耳が熱くなった。耳朵どころか首筋まで熱が広がるのが分かる。指摘の内容が——直接的すぎて、脳が処理を拒否する。自分の身体の内部の状態を晃弥の口から告げられるという事実が、蓮司の理性をもう一枚剥いた。

「うるさい。……黙ってやれ」

「黙ってたらお前が壊れそうだから声かけてんだよ」

晃弥の声が近い。蓮司の耳元に落ちてくる低い声は、任務中の指示とは明らかに異質な響きを帯びていた。息が混じっている。声帯の締まりが甘い。感情が音に滲んでいる。その声を聞くたびに、蓮司の身体の奥が反応して収縮する。声が鼓膜を揺らし、聴覚神経を伝わって、腰の奥に着弾する。

（やめろ。その声を、耳に入れるな——）

「……っ、あ……あ……」

晃弥の指が蓮司の内部のある場所に触れた。蓮司の全身が痙攣する。爪先から頭頂まで、一本の電流が貫いたように。

「ここか。……核、ここにある」

「分かってる。……分かってるから早く——」

「急いだら身体がもたない。……ゆっくりやる」

蓮司は唇を噛んだ。下唇の薄い皮膚に歯が食い込んで、鉄の味がする。ゆっくりやられるほうが辛いことを、晃弥は分かっているのか分かっていないのか。蓮司を壊さないように加減しているのだ。それは分かる。だが加減されることで蓮司は余計に自分の身体の反応を意識させられる。

晃弥の指が核の周囲を探るように動く。ねじ込むのではなく、撫でるように。呪いの核に慎重に生命力を浸透させていく手つきは、退魔師としての技術に裏打ちされた正確さがあった。指先の角度、力の入れ方、生命力の流量。すべてが蓮司の身体を損なわないよう計算されている。

だがその正確さが、蓮司にとっては拷問だった。雑に扱われるほうがまだ楽だ。痛みで意識を逸らせる。丁寧に触れられるからこそ、快楽が純度を増して蓮司の神経を溶かしていく。

「ん、ふ……っ、は、……あ……」

声が止まらない。押さえた手の下から溢れ続ける。自分の口から出る音が信じられない。甘い。掠れて、切れ切れて、

喉の奥から搾り出されるような——自分がこんな声を持っていたことすら知らなかった。声帯が勝手に震えて、息が勝手に漏れて、蓮司は自分の喉を裏切り者だと思った。

「……手、退けろ」

晃弥が言った。蓮司の口を押さえている手のことだ。

「嫌だ。……声が」

「声くらい出していい」

「出したく、ない……っ」

出したくない。声を出せば自分が快樂を感じていることを認めることになる。この身体を認めることになる。男の身体ではなくなった自分を——

「蓮司」

晃弥の空いている手が蓮司の手首を掴んだ。武骨な指が蓮司の細い手首を包み込んで、口元からゆっくりと引き剥がす。力は強いが、手首の骨を傷めないように力の入れ方が制御されている。剣胼胝のざらついた感触が手首の脈の上を擦って、蓮司は自分の脈拍が晃弥の指に伝わっているという事実息が詰まった。

「隠すな。……お前が何感じてるか、俺に聞かせろ」

蓮司の心臓が跳ねた。心臓だけではない。晃弥の声が鼓膜を揺らして、そのまま背骨を伝って腰の奥まで沈んだ。聴覚から直接快樂に変換される回路が、蓮司の中に出来上がりつ

つある。声を聞くだけで身体が疼く。その事実が蓮司を追い詰めていた。

（聞かせろ、だと……。何を言ってる、こいつは——）

「たかし、ろ……お前、今自分が何言って——」

「分かってる」

分かっていない。分かっていたらそんな声で言えるわけがない。低く掠れて、平静を装いきれていない——蓮司の耳がその声の下にある感情を正確に読み取ってしまう。

触れたい。もっと。

晃弥の声はそう言っていた。言葉ではなく、声の震えが。呼気の湿度が。唾を呑み込む微かな音が。

「……お前の手」

蓮司が言った。息が上がって途切れ途切れで、自分でも何を言おうとしているのか分からなくなりながら。

「震えてるぞ」

沈黙が落ちた。晃弥の指が蓮司の中で止まる。

蓮司の耳が拾う——晃弥が唾を呑み込む音。喉仏が上下する微かな音。そして呼吸が一瞬止まって、肺が膨らむ音を立ててゆっくりと再開される。その一連の音が、晃弥の動揺の輪郭を正確に蓮司に伝えた。

「……悪い」

「悪いとかじゃなくて。……鷹城、お前」

追及してはいけない。それは直感で分かった。聞いたら戻れない場所に行く。六年間、背中を預け合って生き延びてきた関係が、問いひとつで不可逆に変わる。

蓮司は言葉を呑み込んだ。

だが——晃弥の震える指先が蓮司の中で微かに動いたとき、蓮司の目尻から涙がこぼれた。

その手が。

蓮司の身体をどれだけ丁寧に扱っているか。まるで何か途方もなく壊れやすいものに触れるように、指の一本一本に神経を集中させて。生命力を注ぐための手順としてはあまりにも慎重で、あまりにも——剣を握るときとは正反対の手つきだった。妖を斬るときのあの獰猛な手が、蓮司の身体の中では息を殺すようにそっと動いている。

（気づくな。気づいたら終わりだ。これは儀式だ。任務だ。……任務なのに、なんでこいつの手は——）

涙が褥に落ちた。小さな染みが畳の匂いを立たせる。

「……なんで泣いてるんだ」

「泣いてない。呪いの、せいだ」

嘘。嘘だ。涙の理由を認めたら、自分の中で何かが決定的に崩壊する。それだけは分かっていた。六年間、合理主義の鎧で覆い隠してきたもの。誰にも必要とされなかった幼少期の記憶。靈感のせいで気味悪がられて、いつも一人だった教

室。誰かの体温に飢えながら、その渴望を理屈で塗り潰してきた——その全部が、晃弥の指先の震えひとつで暴かれそうになっている。

晃弥は何も言わなかった。ただ蓮司の頬を伝う涙を親指で拭って——その手がまた震えていた。親指の腹が頬骨をなぞる。涙の筋を辿る。目尻から顎にかけて、一滴も残さないように。蓮司は目を閉じた。

これ以上見たくなかった。感じたくなかった。晃弥の手が自分にとってどれだけ特別な温度を持っているか——それを認識してしまうことが、今の蓮司にとっては呪いよりも恐ろしかった。

＊

儀式が進む。

晃弥は蓮司の経絡に沿って生命力を注ぎ込みながら、呪いの核に迫る。核は蓮司の下腹部、変化した器官の最も深い場所に根を張っている。黒い瘴気が核から脈動するたびに蓮司の身体が内側から疼いて、晃弥の生命力がそれに対抗するように熱を広げる。

蓮司の身体は段階的に開かれていく。

「あ……、あ……っ」

もう経文は唱えていない。唱えようとしても、九字の一文字目で言葉が快楽に塗り潰される。理性で身体を制御する回